

柳 治男 著

『＜学級＞の歴史学 自明視された空間を疑う』

講談社選書メチエ 2005年3月刊 230頁 1,575円

藤 野 愛

本書では「学級」や「学校」の起源を探るところから議論が始められ、「そもそも学校とはどのような組織としてできあがったのか」ということを問うことを目的としている。その際、視野を学校のみ限定するのではなく、現代を特徴付ける組織や営業形態とも比較しながら検討を進めている。なぜなら、学校や教育以外の人間の活動をも視野に入れて「学級」や「学校」という組織を考えた方が問題をより客観的に理解できると著者は考えるからである。

本書の構成を説明すると、まず第1章では「学級」と「パックスツアー」とが同じ思想的背景から登場したということが述べられている。「パックスツアー」は19世紀半ば、パプティストの宣教師T・クックの福音主義的禁酒運動にその発端を持つ。当時、酒に溺れ社会の底辺に沈んでいく貧しい大人たちを酒から切り離すために、それに代わる娯楽として小旅行を安全で安価に提供するには、それまでの冒険旅行から偶発性を除去し、計画性と利便性を与えることが必要であったという。そのために取り入れられたのが事前制御（フィードフォワード・コントロール）である。これは先回りして事前にすべての外的要因を統制し、あとは単純な作業を繰り返すことで目的が達成できるという仕組みのことである。「学級」という集団もまたこの事前制御の世界にあるとされる。どの曜日、どの時間、どの「学級」の生徒が何を学習するのか、など必要なことはすべて事前に「時間割」として決められている。この事前制御という意味で「パックスツアー」のグループと「学級」集団とは、全く同じ性格を持っていると述べられている。

次に第2章では、学級制とはどのような経過で生まれたかを知るために、イギリスの義務教育制度の成立過程にまで遡るといふ作業が行われている。ここでは、ランカスターの発案によるモニトリアル・システムを追うことで「学級」という概念が出現

するに至った過程に迫っている。モントリアル・システムでは、分業制が採用され、それは進行されつつあった産業革命における機械的生産、そして機械による生産を行う工場に学校をなぞらえたとしている。つまり、分業制を知識の伝達場面に初めて導入した最初の安定的、効率的な大量教育機関として成立したのである。さらに、このシステムは飲食産業や自動車産業よりも教育産業の方が何世紀も先に存在していたことが解き明かされている。しかし、このモントリアル・システムにも限界があった。分業制による複雑なシステムを教場という一つの空間のみで維持することが限界に達し、新たな形式で生徒を掌握するための方法が開発されなければならない時期にきていたということが述べられている。それは、内部からの改革ではなく、外部からの衝撃にさらされることによって、組織は新たな段階へと上がっていくこととなったのである。

第3章では、どうして「学級」を支えるシステムが見えなくなってしまったのかということイギリスと日本の近代史を見直すことで考えられている。モントリアル・システムが限界に達した時点で、ギャラリー方式（一斉教授方式）が考案され導入されたと述べている。これを全国に普及させていく中で、1833年国家は初めて大蔵省補助金という形で、学校建築費の半額を国庫より補助し始めた。これがイギリス教育史上で有名な「教育への国家介入」の始まりであった。そして国庫補助の用途を調査するための監督官制度が設けられ、「学級」は教育効果を測定するための重要な単位となり、生徒の移動を一定程度抑制しなければならなかった。そこで一斉教授の対象として「学級」内に入れられた生徒は、多様な年齢の集まりから同年齢の集団へと変えられていったのである。またそれと同時に、一斉進級の制度、すなわち「学年」制が生まれてくることとなったとも述べられている。つまり、事前制御の要因は能力別から年齢別へと変化し、今日の「学年学級制」が誕生したということになる。

第4章で、これまでの考察から学校には二つのタイプがあると著者は考えている。一つは、教育を受ける側の需要に基づいて成立した需要先行型の学校で、もう一つは、需要とは関係なく慈善活動から始まり最終的には義務教育制度の中に組み込まれたもので、供給先行型の学校と名づけている。そしてこのような二つのタイプの学校を確認することで、通常論じられている学校は供給先行型の組織という特性を持つことを明らかにしている。学校という機械装置を成立させるためには子どもを規律化する必要があった。そこには没人格的な学校モードが支配する空間であったため人を引き付けることはしなかった。そこで「学級」にゼロサム競争と賞罰制度を取り入れることで生徒間に激しい学習意欲を創り出し、存続を可能とするようになったのであると述べている。また、著者が教師と生徒の関係を司牧関係になぞらえて説明していること

も興味深く感じられる。

第5章以降では、日本における「学年学級制」の展開が考察されている。村落共同体という基盤が明確に存在していた日本の社会は、それなりに安定した秩序を持つ社会であった。このような社会に外国産の学校制度を創設するという事は、既存の秩序の中に別の秩序を導入することを意味した。しかし、ここに教師と生徒を学校というシステムに引き入れなければならなかった。そこで入り込んできたのが、導く人と導かれる人との隔壁を設けず、苦難の道を共にするという「同行思想」ではないかと著者は考えている。この意識は、羊飼いと迷える子羊のようなタテの関係ではなく、むしろ苦難を共に抱える存在として、当事者同士をヨコの関係においたのだとしている。著者は「学級」とは村落共同体の論理によって解釈がなされ、自己目的化して感情共同体へと至ったのではないかと指摘している。

1862年の改正教育令によって、学校は6段階の「スタンダード」と呼ばれたクラス制度を強制された。この「スタンダード」とは、もともとはモニトリアル・システムにおいて能力別に分けられた生徒の集まり、すなわちそれぞれのクラスを表示する板のことを意味していた。これ以来「スタンダード」とは、クラスに与えられる名前を意味することとなった。したがって、モニトリアル・システムのクラス分けの原理が、この改正教育令によって全国規模で再現され、現在の学校における「学級」が誕生したのであると著者は評価している。

著者の導き出した結論は「学級」とは自明のものではなく、特殊なシステムであり事前制御された限界のある機能集団であるということである。教育が展開する学級の存在が、そこで行われている教育のあり方を大きく方向づけられているということに著者は気づき、「学級」の存在を当たり前としている常識を捉えなおしているところは、とても刺激的で多くの示唆に富んでいるといえるだろう。